

りびんぐらいぶず 令和2(2020)年2月第3号

衆生往生因 往観偈 アナグマさんの贈り物

ご讃題

その仏の本願力、名(みな)を聞きて往生せんと欲(おも)へば、みなことごとくかの国に到りて、おのづから不退転に致る。

(Ref 『往観偈』註釈版聖典 p46)。

はじめに

書籍を読み、人のお話に耳を傾けるのも楽しいことですが、自ら曾て書き下ろした一文を改めて読み直すことも楽しいことです。新たな話題のコンテンツは、ともすれば堅苦しくなりがちですので、優しい穏やかな話題で昔書き下ろした童話に手掛かりを求めるのはその機会の一つであります。

アナグマさんの贈り物

森の長老のアナグマさんは、若い頃から男気にあふれ頼りがいがありましたが、年を取るにつれ優しさが深まり、縁の下の力持ちのように、困ったり独りぼっちの動物が居ると、誰かれなくきつと声を掛け力になってやるので、みんなから親しまれているのです。

そのアナグマさんにも、毎年一度は野山に降り積もる雪のように年笠が降り積もり、その度に、元気だった頃にはなかった体の不自由を覚えるようになってくるのです。

けれども、アナグマさんは、死ぬことをおそれていませんでした。

なぜなら、死んで体がなくなったとしても、野山の奥深くからやってくるお念仏の信心一つで、心はお浄土に生まれることを知っていたからです。

そして、いつもみんなに次のように言っていたというのです。

「自分にもいつかそのときがやってきて亡くなったとしても、みんなは決して悲しまないように。

なぜなら、君たちが私を思い返してくれるその瞬間、私は、阿弥陀様のお喚び声と一つになって、いつだって君たちのすぐそばに居るのだから」と・・・。

アナグマさんは、いよいよ今夜が最期かと悟った夜、森の動物達みんなに宛てて手紙を書き終ると、囲炉裏の側の藁(わら)座に座ったまま深い眠りに落ち入りました。

そして、不思議なすばらしい夢を見たのです。それは七曲がりの峠道を小走りに駆けな

がら登っている夢だったのです。

昨日まで不自由だった足腰がうそのように、若い頃そのままにしっかりと力強く、走るほどに、体が軽あるくなって地面から浮き上がってくるではありませんか。

振り返ると、山すその野原一杯に、森のみんなと遊んだ日の懐かしい出来事がパノラマのように広がって見えました。

やがて峠にさしかかるとまばゆいばかりの日の光が射し込んでくるではありませんか。

次の朝、・・・いつものアナグマさんの朝の散歩姿が見えないので森の動物達は心配になってアナグマさんを訪ねました。

アナグマさんは、藁座に坐ったまま、息を引き取っていました。

誰かが、囲炉裏端に通の置き手紙があるのに気が付きました。

「お先に行くよ。さようなら...」

「悲しまないように」と、アナグマさんは言っていました、それはみんなにとってとても難しいことでした。

思い出は、初めのうちは悲しみの涙であふれていたからです。

けれど、最後の雪が消える頃には、アナグマさんを思い出す度に、悲しい思い出も、いつのまにか**こころ暖まる**楽しい思い出で終るようになっていました。

それからというもの、みんなの体の奥底から不思議な力が湧き上がってくるのでした。

悲しくて涙がこぼれそうになったときも、自分一人が悲しんでいるんじゃない。

そばでアナグマさんが一緒になって、「いいんだ、いいんだ、悲しいときは誰はばかることなく、思いっきり涙をお流し」と、背中を「とんとん」と、たたいてくれている気がしました。

すると、悲しみの涙は、いつのまにか心の奥底からふつつつと湧き上がる喜びの涙に変っているのです。

苦しくて今にも崩れ落ちそうになるときも、自分一人が力を落としているんじゃない。アナグマさんがすぐそばにいて、「さあ、もう一息、おなかに力をいれてみようじゃないか」と、声を掛け背中を支えていてくれるような気がするのです。

すると、精一杯の上にも、もう一息、信じられないがんばりが効くようになっているのでした。これが森の動物達みんなの日常になったのです。

いつのまにか、みんなは、だれかれなくアナグマさんの贈り物にお礼を言うようになっていました。

「なんまんだぶ、なんまんだぶつ、ありがとう、アナグマさん。」

すると、もうすぐそばに、アナグマさんが居て、「私はいつだって君たちのすぐそばにいるんだから」と囁やいてくれたような気がするのです。合掌

(後書き)このお話は、イギリスの絵本作家スーザン・パークレイさんの「忘れられない贈り物」という作品を元にしています。かつて作品を目にしたとき、私ならこんな風には書きとめてみたいという新たな着想が生まれました。これはかくして生まれた一文です。十六年前に一度びわこ放送で紹介していますが読み直す程に新たな筆で書き直すことが楽しみになりました。

阿弥陀様のご本願が成就して、私の耳元で「なんまんだぶつ」とお念仏になって働いて下さるのは、お名号が人間のこしらえたものではなく、この私に向ってお浄土からやってくる阿弥陀如来のお喚(よ)び声だったからです。

お喚び声は日常生活に埋没している私に「めざめるときだよ」と呼びかけ、お招き下さるのです。如来様のまことのお心がお喚び声になってこの私の胸底に直接働き掛けて下さるのです。

お名号は、今生の道行きの灯火となって輝き、杖ともなり柱ともなって居て下さるのです。懐かしい方とお別れを機縁としてどなた様にもこの如来様のまことのお心が届いて下さるようになるのです。どうか、何方様もお寺で開催する月一回のお聴聞の会にご参加下さい。合掌。

仏教壮年会お聴聞の会 三月八日(日)二十時～

仏教婦人会例会 三月十六日(月)十九時半～

彼岸会法要 三月十八日(水) 十四時、十九時半

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥